

文化

明德館 そこにある価値を考える

小杉 栄次郎

ニューヨーク近代美術館(MOMA)新館や東京国立博物館法隆寺宝物館の設計など国内外で活躍する世界的建築家・谷口吉生さん(84)が今秋、文化功労者に選ばれた。1983年に開館した秋田市立中央図書館明德館も谷口氏の設計によるもので、98年には全国の「公共建築100選」にも選出されている。

秋田市中心市街地の千秋公園入り口に立地する建築は、周辺の美しい自然や地形を丁寧に読み取り、十字型に交差する大きな吹抜と中庭を介し、一般開架、児童開架、参考資料室、学習室という四つの大きな機能が立体的に連続して構成されている。その十字型吹抜は、閲覧(ラウジング)や休憩のためのスペースとなっており、そこを利用する人と、その脇に架かるブリッジを行き交う人が、程よい距離に感じられ、静かでありながら生き生きとした空間となっている。その先の階段を上がると出合う中庭は、意外性があるだけでなく、図書館の奥を優しく光で満たし、自然と人が導かれる有効な仕掛けとなっている。図書館建築の傑作の一つであろう。



秋田市立中央図書館明德館
(開館当時、同館提供)

生かしたい谷口吉生の建築



山形県酒田市の十門拳記念館
(同館提供)

多くが建築の造形や意匠に対して、△開かれた…▽△自然と調和した…▽△地方の特色を表した…▽といったことを共通して要求し、地方特有の造形や意匠が多く取り入れられていた一方で、各地の街並みも建築も個性をなくしていた。そのような意匠の没個性化、均一化について谷口氏は、「△地方らしさ▽ということ」は、継承するのと同じに新しく創造するのだということが、忘れられているためだ」と指摘している。

その上で、秋田市立中央図書館では、「最新の図書館機能を有することはもちろん、敷地が由緒ある小学校の跡地であり秋田市の歴史文化の中心として市民に親しまれていた場所であったという歴史的な背景にも耐えうるような造形を目指した」とし、内部プランの十字を外観にも使用したと説明。また、両端にバルコニーを配した中心性のある正面が前面広場に面しているファサード(立面)は、学校建築でよくみられる造形であり、図書館らしさをわかりやすく表現したものだ、この図書館のデザイン意匠を明かしている。

つまり、安易な「〇△らしさ」の表現に頼らず、敷地と歴史のコンテクスト(文脈)から△秋田らしさ▽を創造しようとしたというところだろう。なるほど、開館から40年近く経った現在でも、静かに、しっかりと△の土地らしさを表現し続け

ている力強い名建築であると、訪れる度に思われる。

そんな誇れる建築資産といつて良いこの建築の現在の使われ方については、少々残念なことが見受けられる。

数年前には、環境に配慮した都市づくりを目指す市の方針のもと、老朽化した灯油ボイラーから、木質ペレットボイラーに置き換えることになり、それが機械室に納まらないことから、前面広場の横に移設され、図書館だけでなく、千秋公園の景観と環境を台無しにしてしまった。このことは、以前に本紙(2017年7月21日付社会面)でも話題になったとおりである。

さらに、その前面広場は本来の計画には無い駐車場として利用され、徒歩で訪れる来館者は出入りする車両を避けながら玄関に向かわなければならなくなっている。周辺の徒歩圏内には駐車場は多くある。図書館駐車場が満車の場合他を使うべきであり、歩行者のアプローチ空間を犠牲にしてまで駐車スペースを優先すべきなのか疑問である。車両重量の負荷により、前面広場の床タイルもかなり傷んでいるようだ。

運営費削減のあたりだろうが、入り口のネーミングライツ企業による館名板のデザインは、建築空間全体を考慮しているようには見えないし、その脇の外壁には大きな蜘蛛の巣が張ったままとなっていた。一歩中に入ると、サイズの合わない



こすぎ・えいじろう 1968年東京都生まれ。建築家、秋田公立美術大学教授。東大工学部卒業後、磯崎新アトリエ勤務などを経て、コードアーキテクト代表。2013年4月秋田美大准教授、18年4月から現職。

大きなベンチが風除室に無理やり押し込まれている。

私は仕事柄、地域の観光に関するアドバイスやコメントを求められることも多い。派手な観光キャンペーンやイベントを行うよりも、現在自分たちが手にしている宝物を大事にすることを勧めたいのだが、いかがだろうか。

竿燈まつりや郷土料理など、現在私たちが引き継いでいる「秋田らしさ」を代表する有形無形の文化資産は、先人たちが日々の営みの中で長い年月をかけて育てつくりあげた結果である。こうして受け継いだ「らしさ」を消費するだけでなく、私たちは未来のために新しい「らしさ」を育てなければならぬのではないかと

参考になる事例を紹介したい。この図書館と同時代に谷口氏が設計した建築に山形県酒田市の十門拳記念館がある。三十数年前に建築学生だった私は同級生らこの美術館を訪れ、建築空間と十門拳の写真に圧倒され、強く心揺さぶられたことを、ずっと鮮明に覚えていた。

秋田に住み始めて、その記憶を頼りに改めてこの建築を訪れると、開館当初のような状態がキープされており、再度、衝撃的な感銘を受けたのだ。たまたま受付の方にその気持ちを伝えると、大変喜んでくださり、しっかりメンテナンスをしていることに自信と誇りを持っていると力強く返答されたことが印象に残っている。

文化遺産とは、建てて終わりではなく、こうして育まれながらつくられるのだと、つくづく思い知らされた。

そこで秋田に目を戻す。図書館の隣に今年の春、秋田市文化創造館が開館した。両者の境にあるコンクリート製の駐輪場を一部撤去して、外構デザインを一体的に整備できないだろうか。文化創造館の木製デッキや1階の市民活動スペースでコーヒーを飲みながら、図書館で借りた本を読み楽しむ人がいる景観が生まれそうである。素敵など想像が膨らむ。

そうした改修の機会があれば、図書館の設計者である谷口氏にまずは相談し、ぜひ秋田市の文化遺産としてさらに育ててほしいと切に願う。



前から戦後にかけて活躍したモダニズムの建築家谷口吉郎。

谷口 吉生さん＝写真 1937年東京都生まれ。慶応大卒業後、丹下健三都市・建築研究所を経て独立。直線と幾何学を多用する洗練された建築で知られ、日本建築学会賞など活躍。長年の功績が認められ、本年度の文化功労者に選ばれた。父親は戦